

関ガ原の鬼火

泰山哲之



歴史小説
選書 4

人物往来社

関ガ原の鬼火

泰山哲之著

人物往来社 歴史小説選書 4

＜著者略歴＞

1924年、広島県庄原市掛田町に生まれる。1946年、日本大学文学部卒業。中国新聞記者を経て、現在、株式会社人物往来社専務取締役。著書「日本の名城」「歴史の旅」「古城をめぐる」（以上各正統）「古戦場」「日本歴史の旅」（上・中・下）「古戦場の旅」等多数。



検印廃止

歴史小説選書 4

関ガ原の鬼火

昭和42年 3月10日 発行

著 者 やすやまてつゆき
泰山哲之

発行者 八谷政行

発行所 株式会社 人物往来社

東京都千代田区丸ノ内3ノ2新東京ビル
電話 代表 (212) 3931 振替 東京 101

定 価 390 円

印刷・植産堂 製本・長谷川製本
乱丁・落丁はお取替いたします。

目次

関ガ原の鬼火	一
本能寺の変	四
応仁の乱	二四
巷説武藏坊弁慶	一四五
剣豪大名	一五五
津軽三代記抄	一六五
隼人の国の守護	二〇六
幕末「一領具足」物語	二三八
陽炎の城	二四五

関
ガ
原
の
鬼
火

関ガ原の鬼火

慶長五年九月十五日、徳川家康の率いる東軍七万五千と、石田三成らの西軍十二万八千の大部隊が、青野ガ原（関ガ原）で激突した。

世にこれを関ガ原の役というが、その前日の九月十四日正午、西軍の斥候が慌しく大垣城の本営に帰って来て、江戸を出発した家康が、大垣と目隄の間にある美濃赤坂の陣営に到着したことを報じた。ために西軍兵士の間に動揺が起り、石田三成の家老の島左近勝猛は、士気を鼓舞しようと五百余人の部下を率いて大垣城を出た。

大垣と赤坂の間は約一里余で、その中ほどを杭瀬川くわいせが北から南へ流れている。島左近は途中に伏兵を置いて川を渡り、東軍前衛部隊の前面に現われ、敵を誘出おびきだして退却した。東軍は杭瀬川を渡って追撃したが、遽かに背後から伏兵が襲いかかり、忽ちのうちに東軍の兵数十人が斃たされた。赤坂の本営からこれを望見していた家康は、ただちに本多忠勝に命じて兵を引揚げさせた。

この間、家康は諸隊に命じて敵の兵力を探らせたところ、殆んど報告が十万内外であった

が、黒田長政の家臣の毛屋武久だけは約二万と報じた。家康はその訳をただと、関ヶ原南方の松尾山、南宮山の兵は山上にあって戦意なく、二万の兵は真に実戦参加の兵員数であると報告したので、家康は大いに喜び賞した。

そこで家康は、大垣城から西軍を誘い出して戦おうと決意し、諸將を集めて、

「明十五日出発、佐和山城（三成の居城）を屠り、大阪に向って前進せよ」

と命じた。そして忍びの衆を大垣の城下に潜入させて、「東軍、大阪に向う」という噂を、西軍兵士の間に吹聴ふききさせたのである。

さて、本稿は、こういう状況のもとに、十四日の午後の関ヶ原の出来事から始まる。すでに小早川秀秋の離反を予知していた西軍の総参謀、大谷刑部少輔吉隆（継）に果して如何なる策略があったのであろうか、勝敗の岐路はここにあった。

雨滴を含んだ風は午後になって烈しさを加えて来た。

四人の武将

明治の中ごろ、東海道本線が関ヶ原に敷かれたとき、工事現場から夥おびただしい人骨が出て来た。

いまも関ヶ原の駅から中仙道を西へ四、五百メートルばかりいったところに、西軍の戦歿将兵を

供養した西の首塚がある。合戦当時、付近一帯は高原の中央峡谷になっていたといわれ、東軍の藤堂高虎の陣地跡でもあり、西軍の宇喜多秀家の前衛部隊が福島正則らの挾撃をうけて、この峡谷に全滅したところだ。人骨が出てきたのは、ちょうどこのあたりで、首塚には馬頭、千手の二つの観世音菩薩を祀った小さな祠ほくらがある。

関ガ原の戦後、遺棄死体は垂井宿あたりの農民までかり出されて片付けられたが、草むらや峡谷の低地には、首のない死体が散乱していた。雨の夜は、高原のあちこちに青い鬼火がちょろちょろと燃えていたといわれ、旅なれた仙道の旅人たちですら、関ガ原の夜道はさけたという。

関ガ原に散った西軍将兵の無念さが、いつまでも鬼火となって燃えつづけたのであろうか。

戦争に悲劇はつきものであるが、この合戦ほど、各人が異った宿命と人生観によって一身を捨て、武門の命運を賭けて争った戦さはないであろう。まして義と名分が徹底しないまま戦争に突入しなければならなかった西軍の悲運さは例えようもない。

鬼火となつてなおも燃えつづけようとする多くの魂魄の中から、人、それぞれの立場を代表する主なものを拾ってみると、――戦い敗れ、処刑の瞬間まで徳川覆滅の執念を捨てなかった西軍の首謀者石田三成、敗軍を予知しながら三成の情誼に報ゆるため、智略をかたむけつくし、壮烈な死をとげた大谷吉隆、士を知るものために死んだ三成の家臣蒲生郷舎、そして素朴な君臣の情に身命を捧げた島津豊久というところであらうか。

風雲の関ガ原

世の中は不昧因果の小事をよしあしともにめぐりはてぬ

太閤秀吉が甥の関白秀次を、謀逆の罪ありとして高野山に切腹させ、その首の前で秀次の妻妾、幼児に至るまで三十余名をことごとく処刑したさい、口性くちぎがない京童きやうわらわが、その夜、町々の辻に捨て札を立てた文句である。

文禄四年七月のことだが、それから三年後に秀吉は歿し、さらに二年たった慶長五年九月、伊吹山麓の美濃国関ガ原の宿では、来る日も来る日も兵馬喧騒の日がつづいた。

秀吉が死んでや々と朝鮮の役も終り、ほっとひと息ついたのも束の間、早くも民衆は因果の小事が廻り始めたと思ひ、豊臣政權の前途に暗い翳かげを予感した。それだけに石田三成が八千の兵を率いて佐和山城から中仙道を下り、大垣城に入城したときも、垂井宿から小関村（いまの関ガ原町）までの街道に近い部落の人々はそれ程驚かなかった。ただ今度の戦争が天下を二つに分けるほどの、大きな運命をもっていることだけは、街道往來の旅人たちの噂で知られていた。

三成が大垣城に入つたのは八月十一日、すでに入城して旬余の日が過ぎたが、どこで二つの勢力が激突するかは、誰にも予測できなかった。はじめ西軍側では尾張か、あるいは東美濃方面

で、西上する東軍を邀撃しようと計画したが、作戦通りにはいかなかった。

九月に入って戦機は慌しく西美濃方面に動いた。越前から大谷吉隆の部隊が関ガ原の西、山中村に駐屯して中仙道を扼した。このころ小関村の住民たちの間にも不安がみなぎりはじめ、晩秋の気は山野にみちて、日の光りは弱く、冷気はひとしお厳しくなってきた。

つづいて伊勢路から毛利秀元らの三万の部隊が続々と到着、十四日になって近江から小早川秀秋の率いる八千の部隊が関ガ原の南、松尾山に陣して、関ガ原でひと合戦はじまるという噂が、街道に近い部落に知れわたった。

当時（いまから約三百六十年前）の関ガ原は東西一里、南北半里の荒涼たる原野で、青野ガ原と呼ばれた。高原を貫流する相川や藤古川の溪谷にそって、わずかな田畑があるだけで、人家も二、三十戸が山陰に点在するにすぎなかった。宿場といっても中仙道と北国街道のわかれ道――、いまの国鉄関ガ原駅の近くに茶店と馬借の家が数軒あるだけの蕭条とした山里である。

その青野ガ原のまん中を、幅一間にみたない赤土の中仙道が、白くかわいて東西に走っている。時折り、伝騎の武者であろうか、砂塵をもうもうと蹴たてて、疾風はやてのように駆け抜けていった。

青野ガ原の禿鷹

慶長五年九月十四日、太陽暦になおすと十月二十日である。その日の午後、薄青の絹布で頭をつつみ、ところどころ紺色をほかした白絹の直垂に、朱の膝鎧をつけた武将が籠に乗り、十数人の騎馬武者に前後を警護されながら、ゆっくり関ガ原を東へ向かった。

廂ひましが低くて、薄暗い沿道の農家の陰から、いくつもの眼が、黙々と行進する一行にそそがれていた。やがて、その武士団の姿が、宿場のはずれに、猫の背のような形でわだかまる南宮山の山裾に隠れようとするころ、軒下から異様な風態をした数人の人影が、ばらばらと街道にとび出した。何処かの戦場で拾ってきたのか、着物の上に腹当や、草摺をつけた者、腰当だけをつけた者もいた。

彼らは関ガ原近在に住む百姓たちだが、戦争が始まれば、旗色のよい方に足輕として傭われたり、戦さが片付けば、たちまち野伏に早変わりする、いわゆる陣場稼ぎと呼ばれる連中である。死体から武具を剥ぎとったり、落人を待ちうけて、略奪をほしきままにする戦場の禿鷹だ。合戦のたびに痛めつけられる彼らには、これがせめてもの代償なのである。

街道にとび出した土民たちは、過ぎ去った一行のあとを眺めながら、いまの武士は誰だろうか

と、口々に勝手な臆測をわめいた。

「鎧もつけず、目をつむっていたな、あの侍は……」

中の一人がそういうと、槍傷であろうか、首筋を斜めに、相当深い傷あとのある四十がらみの男が、

「山中村にいる大谷刑部だろう。さては、大垣で軍議でもあるんだな」

分別顔にいったこの男は、作兵衛といって、二、三年前より小関村に住みついた流れ者である。首傷が何よりの証拠といわんばかりに、もとは近江京極家の手の者だといったが、傷の話も、百姓になったわけも、しごくあいまいで、彼の経歴は誰も知らなかった。

土民たちはふたたび家の中に入った。今度は勝敗の帰趨を喋りはじめたが、作兵衛は悠々と通りすぎた大谷刑部の姿がどうも気になった。あの男のまわりで何か起りそうな予感がするのである。ゆっくりと腰をあげると肉のもりあがった不気味な首傷をたたきながら、

「どっちだって、わしらに係りあいはないだろう。さっきの、大谷の首にでも、目をつける算段をしたらどうだ」

ぎょろりとむいた作兵衛の目玉は笑っていた。

「家来がついているから手強^{てご}かろう」

「なあに、しれたもんだ。この槍で、ひとなぐりしたら吹飛んでしまうわい」

三成にささげた。老婆は佐和山の領内の者で、せめて名残りと、庭の柿の実を、わざわざ京まで持ってきたものである。この逸話が事実かどうかは分明でないが、当時、三成によせる民情からいえば、そういうことがあったとしても不思議はない。

そういう詮索はとにかく、三成の噂が関ガ原の農民たちにもきこえて、何となく彼らに好感を与えたものであろう。

土民たちはとりとめもない話をわめきつくして、

「ひとまず山にでも隠れているか」

という声を合図に青野ガ原の茂みの中に散っていった。

夕刻近くになって、小関村一帯の住民たちは家財道具を背に、われもわれもと伊吹の溪谷に逃げ出した。

突兀^{とつち}として聳える伊吹の山巔は、どす黒い雨雲に覆われて殺気をはらみ、みるみるうちに暮れていった。

乾坤一擲の作戦

関ガ原を西に向かった盲目の武将は、土民の作兵衛がいったように大谷刑部吉隆である。

吉隆はもと九州豊後の大友宗麟の家臣だ。天正年間、大友氏は薩摩の島津氏が攻められて悪戦苦闘、たまりかねた宗麟は秀吉に島津征討を乞うため上坂した。このとき宗麟の供をしたのが三十二歳の吉隆。秀吉は彼のすぐれた才幹を見抜き、宗麟に貰うけて家臣にした。果してなかなかの人物、ついに敦賀六万石に封ぜられ、軍略にかけては当代随一とも称された。五奉行の一人にもなかったが、後に癩を病んで職を辞した。

三成とは二十年来の交友であるが、はじめ吉隆は、家康の上杉征伐に従軍しようと、近江の垂井宿まで軍を進めた。このとき三成は佐和山に隠退して、はるか会津の上杉景勝の重臣、直江山城守と謀っていたので、ひそかに吉隆をまねいて密謀を告げ、味方に引き入れようとした。しかし吉隆はなかなか応じようとはしなかった。

「内府（家康）の振舞もさることながら、いまだ秀頼公もご幼少、軽々しく事を構えれば却って内府の思うところ……、まして今日、内府と戦って勝算のある者はござるまい。かく某それがしが病を冒して従軍するは、内府と会津中納言（景勝）の間にあって、ひたすら調停を願うためでございます。治部少輔（三成）殿、願わくば、某の申すところを察して、熟慮に、熟慮を重ねられたい」

業病にほとんど視力を失い、手足もあまり自由にならない吉隆は、おぼろにかすむ三成を見つめて、しゃがれた声で諫めた。

「刑部殿のご意見、もっともに存ずるが、このたびのこと、すべて故太閤に報ゆるため、某一